

沙条愛歌に憑依物語

TYPE—HAMELN

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『Fate／Prototype』の黒幕にして、前日譚『蒼銀のフラグメンツ』の主人公。

沙条綾香の姉。8年前の聖杯戦争にて、セイバーを召喚した最強のマスター。

沙条愛歌

マスター階梯 第一位・熾天使

魔術系統 なし

魔術回路・質 EX

魔術回路・量 E

魔術回路・編成 異常（過去に該当なし）

C V 豊崎愛生

あらゆる全てが可能で、あらゆる全ての事象を知り、あらゆる全てを認識する機能を
持つ、文字通りの『全知全能』。

—これはそんな彼女に憑依した人間の新たな物語である

目次

第一章—原作開始前—

一話	1
二話	5
三話	8
四話	11
五話	14
六話	18
七話	23
八話	27
九話	32
十話	36
十一話	39

十二話

——

43

十三話

——

47

第一章―原作開始前―

一話

憑依した。

言葉にするととても簡単な話だ。

オレは沙条愛歌に憑依した。

どうしてそうなったのかはわからない。そして理解する気もない。

重要なことは過去ではなく現在で、さらにいえば未来である。

さて、沙条愛歌。彼女についてだ。今はオレだが本来は違う。

TYPE―MOONの作品群の一つ。Fate世界を舞台とした作品に登場したキャラクター。

その中でも彼女は最強のキャラクターとして登場した。

まず彼女を表現するならばそれは『全知全能』

あらゆる全てが可能で、あらゆる全ての事象を知り、あらゆる全てを認識する機能を持つ、

文字通りの『全知全能』。

これは根源と呼ばれるあらゆる全てと、接続している「根源接続者」であることから来ている。

誕生した時から「根源」に接続しており、

あらゆる物事に非常に高い適性を持つ文字通りの「天才」だが、

そういった「全能」であるが故に生まれながらにして退屈、

人間性や人としての感情が希薄であり、生きた亡霊のように「死にながら生きて」過ごしていた。

魔術回路の数は少ないが誕生した時から「根源」に接続している為に圧倒的な魔力を有し、

8歳の時点で2つの系統の魔術を完璧に修得している。

魔術師としても天性の才能を發揮し、系統を問わずあらゆる魔術を極めており、

その能力は魔法使いと同等、もしくはそれ以上で既に神代の魔術師すら超える力を有しており、

空間転移を始めとする現代の魔術師では不可能な魔術を何の準備も行わずに平然と使用し、

眼光だけで他の魔術師は次元の違いを思い知らされる。

戦闘においてはサーヴァントを容易く殺害できるほどの殺傷能力を持った触手を発

生させ、

その気になれば平行世界への干渉どころか、

世界の裏側や世界の表裏を繋ぎとめる楔が置かれた場所にでも行くことが出来る。

不可能に等しい奇蹟をも可能にできるが、

魔術回路の数が少なく規模と回数にある程度の制限がある。

根源接続者はその気になれば未来も予知でき、事象を編纂して未来と可能性を改変でき、

その多くはヒトのままにいる意味も感じられず、生命活動すら止めようとしていた。

そこで、彼女が自分に課した唯一の枷として未来視を縛り、

「自分の行き着く先」だけは絶対に視る事も知る事もしようとしなかった。

この世界には魔術を使う魔術使い。根源を目指す魔術師。そして根源に到達した魔法使い。

これら神秘に寄り添う存在がいる。彼らは非常識な「過程」や「結果」を起こすことができる。

個としてならば一般人のスペックを超えているとも言えるかもしれない。

とにかく普通ではない存在だ。その力の源泉はいわゆる「神秘」と呼ばれるものにある。

これは歴史があればあるほど、古ければ古いほど強力な力だ。

そして根源とはその「神秘」すら内包している。

総括すれば―この地上に彼女を見て頭を垂れぬ者なし。

そんな言葉が似合う超越者。それが彼女であり、そして今のオレだ。

一話

全知全能になった。

オレはその事実に歓喜する。それはそうだろう。だって凄じやん！

まるで神様みたいだ。人間なのに神様に近い絶対的な力。これは嬉しい。

ものすごく興奮する。最高だ。今までの人生の中でもトップクラスの出来事だ。

人は古い衰え病に苦しみ尊厳を失いながら汚物に塗れ死んでしまう。

それはそれは残酷な運命だ。それはヒトに限らず生命体の定めのようなもの。

そのはずだった。しかしどうだ。オレは今そのような定めからおさらばできる空想

の住人だ。

全知全能。それは老いを克服し、衰えずに、病に苦しむことなく、尊厳を保つことができる。

そもそも汚物とも無縁になれる。そう根源さえあればね！

アイドルはトイレなんていかない！そんなファンタジーが現実になるといふ事実。

将来を思つて不安になる必要すらない。何故なら将来とは自分の思い通りになるのだから。

もちろんこれは極論だ。アラヤやガイアといった抑止力の存在もある。不可能に等しい奇蹟をも可能にできるが、

魔術回路の数が少なく規模と回数にある程度の制限がある。

今の状態ではまだまだ付け入る空きがある。全知全能とはいえ無敵ではない。しかしどうだ。空きがあるなら埋めればいい。そのための力がオレにはある。

何よりもこの世界が滅んでも別の世界線、好きな時間軸を行き来できる。

欲しい物だつて何でも手に入る。これで喜ばずに何で喜べというのだろうか？

根源接続者はその気になれば未来も予知でき、事象を編纂して未来と可能性を改変できるが、

その多くはヒトのままにいる意味も感じられず、生命活動すら止めようとしていた。けれどもそれはオレには当てはまらない。

そもそもヒトのままにいる意味を感じないからといって、生命活動を止める事自体に意味を感じない。

別にヒトのままでもいいじゃないか。意味なんて感じなくてもいいじゃないか。

生きるのに理由があるのか？まあ、それだけ感情を希薄にしようということなんだろうが、

もともと全能ではなかった身の上のオレからすれば関係ない。

あるいはそれこそが、オレがこの「全知全能」に憑依した理由なのかもしれないな。ともあれ、オレには喜びこそあれ感情が希薄化していくことはなかった。とりあえずやることは決まった。

不殺の誓いを立てよう。ヒトとしての人道的な観点からであり、同時にアラヤという抑止力へのとりあえずの対策としてでもある。

なによりもそれが可能な力がオレにはあるのだ。ならばオレの手を汚す必要はないだろう。

それから不可能に等しい奇蹟をも可能にできるが、魔術回路の数が少なく規模と回数にある程度の制限があるというこの「制限を超越」する。

ヒトは脆弱だ。殴れば死ぬし刺されても死ぬ。空気がなくても死んでしまう。

この世界は死が近い。そして死ねば救われるとも限らない。それをオレは理解している。

だからこそ、限りなく不滅に近い存在になろう。これはそのための礎である。これこそがオレの直近の目的だ。

三話

人形を作ろう。

憑依したばかりだが、人形を作ろうと思う。

この世界ではヒトの命はたやすく失われる。

全能がヒトの形をとったかのようなオレであってもそのリスクは何時だって存在している。

オレを殺す方法は多くある。例えば、セイバーのような強力な英雄たち。

人類悪であるキアラの知性体特攻。

カルデアのクラインコフィン（霊子筐体）のような、

コフィン内に居る状態だと生存と死亡が不明な状態。

直死の魔眼による攻撃などなど全知全能とはいえ対策しなければ殺せる方法は多く存在する。

当然ながらオレは死ぬつもりはないし対策はする。どこぞの慢心王とは違うのだよ。

それで最初の人形を作ろうという話だ。これは人形師の魔術師である蒼崎橙子が参考だ。

「自分と何一つ変わらない人形」を制作したことで、

最高位の人形師として封印指定を受けた魔術師で魔法使いの姉でもある。

以外にも魔術回路は並の魔術師の平均の少なめから同程度だ。

材料は投影魔術を使い用意する。本来は世界の修正力で時間を経れば魔力に戻ってしまうが、

オレならば壊れるまでは半永久的に残り続ける代物を投影できる。

人形を作る経験はオレにはないが、だったらその経験を自分に憑依させればいい。

憑依経験という投影した武器の使用者の技術を模倣する技がある。

長年使用された刀剣には意思が宿り、その意思と共に刀剣に宿る

「使い手の経験・記憶」ごと解析・複製している。このため、

仮に初見の武器の複製であっても完全ではないがある程度扱いこなすことが可能。

例えば投影の使い手である衛宮士郎は投影する際に以下のことを解析する。

「創造理念」、「基本骨子」、「構成材質」、「製作技術」、「憑依経験」、「蓄積年月」

具体的に言えば、創造の理念を鑑定、基本となる骨子を想定、構成された材質を複製、製作に及ぶ技術を模倣、成長に至る経験に共感、

蓄積された年月を再現することで真に迫った物を投影している。

この「成長に至る経験」を解析した結果、扱い方の知識を得る。

もちろん、戦闘とは違う人形作りでは一つの道具だけで作るわけではないだろう。オレが利用しようとしているのはこの、「成長に至る経験」の解析だ。

根源にはあらゆる蒼崎橙子の人生が存在している。何故ならば、

TYPE—MOON世界におけるすべての現象、因果はこの根源の渦から始まっているからだ。

物質、概念、法則、空間、時間、位相、並行世界、

星、宇宙、宇宙の外の世界、無、生命、死などのあらゆるものがここより生まれ、存在しているとされてからだ。それだけではない。

過去現在未来、果ては並行世界にまでわたる情報と知識もこの中に存在している。

「根源接続者」であるオレはそこから知りたいことを知ることができる。

故に全知であり、全能なのである。

例えば衛宮士郎が投影する際は投影対象を視認する必要がある。

逆にいえば、視認することができなければ投影することはできないということだが、オレならば、そのような制限はととても希薄なものである。

そうしてオレは人形を作った。

四話

完成した人形。

オレが作成した人形を見て感嘆する。

自画自賛だと思いかもしれないが、とても感動している。

オレの目の前には沙条愛歌がいた。

触れてみる。とても人形とは思えない。まさに人間だ。

双子かクローン人間のようなだと思ってしまう。こんなものを自分が作れてしまうと
は、

根源の凄まじさに笑ってしまう。これは魔術師が根源を目指すのも無理はない。

そう思ってしまうほどにそれはよくできていた。

この人形は初めて作ったこともあり、その機能はシンプルだ。

「自分と何一つ変わらない人形」これに尽きる。

その用途は単純で、自身の身代わりでありスペアである。

最低限の安全の保証がほしかった。これから先にオレが行うことを考えれば必要な
ことだ。

時間は有限であり、そうでなくともオレがやろうとしていることを考えると、余計なことをしている暇はないと思ってしまう。もっと多く安全策を用意しておきたい。

一刻も早く安全を確保したいと焦っている。それはオレが沙条愛歌という超越者とは違い、

ただそんな規格外に憑依してしまっただけの人間だという自覚が呼び起こす危機感だった。

オレは知っている。この世界の危険性を、この世界が空想の産物であることを知っている。

漫画やアニメや小説で、CDや映画やゲームで娯楽として楽しんできた。

カタログスペックだけではなくにもならないことがあることを知っている。

ある日突然前触れもなく世界が滅ぶ。それはこの世界では起こっても不思議ではない。

ありえる可能性なのだ。この世界はただの娯楽の上で成り立っている。

この世界の生命の価値は低い。次のコマでは消えても死んでも滅んでも大差はないのだ。

この世界は二次元であり、三次元の存在からしたらそれは数ある作品群の一部であ

る。

その作品のなかで何人死のうがどれだけ生命が失われようがそれはフィクションの出来事。

そんな世界にオレはいる。この世界がフィクションだとオレだけが知っている。

そのはずなのに、どうしてオレはここにいる？オレは何故二次元の存在になつたんだ？

そんな疑問が頭をよぎるがさして重要なことでもない。何より今も根源により、

その三次元に干渉が可能なのだ。ならば二次元とか三次元とかそんなの関係ねえな。

第4の壁への干渉。そんなの今どき珍しくもない。

話がそれだが、オレはもっと安全を確立したいと思つているということだ。

それにも関わらず、オレは目の前の人形に夢中になつていた。

触れてみる。撫でてみる。抱きしめてみる。動かしてみる。

いつまでも遊んでいたいがそろそろ次へ移行するでしょうか。

次は人形を使って世界の滅びから逃れられる場所の確保へ向かう。

五話

全て遠き理想郷。

アヴァロン。アヴァロンの塔。人理焼却後も影響が及ぶことのなかった場所。

その場所に人形は立っていた。そうオレだ。そして目の前には一人の女性がいる。

旧マーリン『Fate/Prototype』時空の女性マーリン。

「見つけた」

彼女こそが最高位の魔術師の一人にして、ボクっ娘であり、人と夢魔との混血。

花の魔術師マーリンだ。オレはこの場所が必要だ。そしてこの魔術師はその障害になりえる。

なんとしてでも処理しなければならぬ相手だということだ。

根源接続者はその気になれば未来も予知でき、事象を編纂して未来と可能性を改変できる。

オレは沙条愛歌であって沙条愛歌ではない。故に未来視を縛り枷とはしていない。

だからこそ、マーリンの対策へそれらを利用した。

「あなたが花の魔術師。マーリンね♪」

―根源でマーリンの場所を確認して空間転移で背後を取る。

―まず「統一言語」で五感を封じこめる

それは人が人に話しかけるのではなく、世界そのものに話しかけて意味を決定させる言語。

人々が分かれる前にあつたとされる「真理」のようなもの。

存在論的なヒエラルキーとして、モノが世界に存在する時には、

「世界に存在するモノ」がモノの上に位置する。

世界に意味を伝える統一言語によって

「世界に存在するモノ」に話しかけられ意思を伝えられると、

「それに否定する」ということが「世界に存在することの拒否」になるため、

抗うことができない。故に「言語絶対」。オレの言葉はそのまま真実となる。

―次に投影した「愛の霊薬」を無理やり飲ませる

霊薬に長ずる一流魔術師のナイジェル・セイワード。

靈薬生成の術式にはナイジェル自身の起源「執着」を組み込んでいる。

それ故にサーヴァントにすら効果がある靈薬となる反面、

ナイジェル自身にしか生成出来ない靈薬となっており、その継承もほぼ不可能。

故に継承でもなく生成でもない。投影したものを利用した。

—「触手」で全身を拘束する

それはサーヴァントを容易く殺害できるほどの殺傷能力を持った触手だ。

根源接続者である沙条愛歌が原作で使用していたものだ。その強さは折り紙付きだ。

—「精神操作」をかける。

他者の精神に干渉する魔術は、物質的な代償を要しない代わりに術者の精神にも影響を与える。

人を呪わば穴二つ。とはいえ既に神代の魔術師すら超える力を有しているオレの魔術だ。

その影響は影響たり得ない。

—「結果」花香る美しい女性は今、ビクリビクリと四肢を震わせる。

足が震えて立ち尽くしている。思考と肉体が一時停止する。

動けない。体も心もあつけないほどにすくんでる。

震える唇から声さえ出ない。

その姿にドキドキする。こうなることはわかっていた。

対策を練り、その方向で成功する未来を見つけた。

こうなる未来へと可能性を改変した。

それでも、オレを超えてくるのではないかと思っていた。

それは杞憂だと断言できるほど、この世界は甘くはないことをオレは知っているからだ。

この状況はオレの望んだ未来であり、そして訪れた現在だ。オレは彼女に語りかける。

「お友達になりましたしょう?」

六話

契約。

花の魔術師。マーリン。ボクっ娘の女性であり、今はオレの「お友達」だ。

彼女はオレの「お友達になろう」という問いに肯定した。

干渉魔術。支配、魅了といった魔術を織り交ぜながらオレは彼女を誘導する。

言葉を連ねる。魔術を重ねる。体を重ねる。

どこまでも深く彼女と交わる。

オレの言葉に肯定するよう誘導する。それをわかっているのだろうか？

言うまでもない。わかっているに決まっている。

それでも彼女は、オレの思いのままになつていく。

それは「命令に従う」という問いに肯定する。

オレはどんどん自分に都合の良いような言葉を投げかける。

その全てに彼女は肯定していく。彼女の動きは辿々しくともまともな状態には見えない。

だがそれでも今の彼女であつても油断することはできない。

何故なら彼女は最高位の座に位置する冠位の魔術師であり、その証たる『世界を見通す眼』——「千里眼」の保有者。

マーリンの千里眼は、何処に行かずともその時代の万象全てを把握し、

その顛末を読み取れるというもの。そして千里眼保有者は、生まれながらにして魔術の最奥にして真理に到達している。けして悔えることはできない。

だがオレは知っている。どんな存在も完全無欠ではないと。さらにオレは言葉が続ける。理解者の顔をして話しかける。

「あなたは異端者。そうして疎外感を感じている」

彼女はしかし、それゆえに、

人間として生まれながら人間の視点を得られなかった異端者としての疎外感を感じている。

「私なら理解できるわ♪」

マーリンの人間に対する冷酷とも言える見方も、この千里眼が大きく影響を及ぼしている。

「私ならいつまでも一緒にいてあげられる」

マーリンはとても優秀だ。彼女を襲ったあの一瞬でオレの存在も、その本質も理解しただけだ。

アヴァロンという特異な場所。そこに瞬時に顕れたオレという存在。そして繰り返し出されるのは神代の魔術師すら超える力の数々。

普通じゃない。それは明らかだった。人間でありながら異端者である。

——そしてそれは花の魔術師マーリンにも同じことが言える。

——語りかけながら、彼女に合わせて作り上げていた「魔術刻印」を彼女になじませる。その効果は死亡時に自動的に起動してその持ち主を蘇生しようとするもの。

それでもこんなものは本来、彼女にはまったく必要のないものだ。

生まれながらにして魔術の最奥にして真理に到達している存在であるのだから。

だからこれは呪いだ。

—彼女は「セルフギアス・スクロール」にサインする。

『自己強制証明』（セルフギアス・スクロール）

それは権謀術数の入り乱れる魔術師の世界において、

決して違約不可能な取り決めをする時にのみ使用される、最も容赦のない呪術契約の一つ。

自らの魔術刻印の機能を用いて術者本人に掛けられる強制の呪いは、

如何なる手段を用いても解除不可能であり、たとえ命を差し出したとしても、

次代に継承された魔術刻印がある限り、死後の魂すらも束縛される。

制約が破られるなどした場合は魔術刻印が自動的に反応し、違反した魔術師の体を内側から蝕む。

たとえ契約者本人に抵触する意思がなかったとしても、

「契約違反である」と見做された時点で問答無用で呪いは発動する。

その行為が中止されない限り呪いは持続し続け、

最終的には目や口から血を溢れさせた苦悶の表情で死に至る。

この証文を用いての交渉は魔術師にとって最大限の譲歩を意味し、

魔術師の間では滅多に見ることのできない代物である。

そんなこと彼女が知らないはずがないだろう。

「これで私たち、本当のお友達ね♪」

——それでも彼女はこの呪術契約を結んだ。

七話

魔眼。

オレの次のターゲットだ。

魔眼は独立した「魔術回路」であるため単体で魔力を生成可能な代物だ。

外界からの情報を得る為の物である眼球を、外界に働きかける事が出来るように作り変えた物。

魔術師に付属した器官でありながら、それ自体が半ば独立した魔術回路。

血筋に関係なく適応できる特殊な魔術刻印に近いもの。しかしリスクもある。

魔眼は脳と強く結びつくものであるため、

魔眼と魔術回路の接続解除には繊細な処置をしなければならぬ。

無理矢理に外すこともできるが、その場合は魔眼から溢れた魔力が脳を破壊する危険性がある。

魔眼が生み出す魔力と術式が必ずしも釣り合うとは限らず、最悪の場合は術式を勝手に発動し、

宿主の魔術回路からも強制的にオドを絞り出すため制御しきれない場合は非常に危

険だ。

逆に魔力の扱いに長けていれば、魔眼の「魔術回路」を宿主のそれに上乗せできる。それがオレの目的だ。——オレには不可能に等しい奇蹟をも可能にできるが、「魔術回路」の数が少なく規模と回数にある程度制限がある。

ならばその「魔術回路」の数を増やせばいい。

そもそも魔力回路、マジックサーキットとも呼ばれるそれは魔術師が持つ擬似神経であり、

生命力から魔力への変換、大魔術式への接続などを担っている。

魔術回路の増減は臓器の増減同様、可能だが負担が大きい。また減った回路が戻ることはない。

求めるのは魔術回路。そのためにオレは魔眼を手に入れる必要がある。

リスクを最小限にリターンは最大限を求める。オレならばそれは容易い。

とはいえ、それが欲しいといっても容易に手に入る代物ではないとされている魔眼だ。

魔眼を持つ者は希少である。そこら中にあるような代物ではない。それだけではない。

そもそも魔眼とは摘出するだけでも至難の業だ。現代における魔術師たち、

バルトメロイやトランベリオといった三大貴族に名を連ねる有力な家系でも二の足を踏む程だ。

そして、それは移植も同様だ。その行為はロード・エルメロイⅡ世曰く、「ある意味で嵐やマグマを切り離し、他人の身体に封じ込めるようなもの」であるという。

だがそれは現代魔術師における常識だ。オレからすれば、摘出も移植も何ら障害とはなりえない。

オレはヒトを殺さない。不殺を掲げている。もちろん強制力のあるものではない。努力目標といった所だ。この世界では命は吹けば飛ぶようなものである。

それが避けることができないものであるのならば、諦めざる負えない。

しかし避けられるものであるのならば避けるべきだろう。

無闇に敵を作るようなやり方はナンセンスだ。それにアラヤの抑止力のこともある。その上で魔眼を入手しようというのなら、方法は絞られる。

それにこれは必要なことでもある。魔眼のことを抜きにしても会わなければならぬ相手である。

事象は編纂した。オレの望む未来と可能性を改変する。時間は有限だ。何、直ぐに済む。

——死徒二十七祖第十五位。

自称、芸術家のお嬢様の元へとオレは空間転移した。

八話

リタ・ロズイーアン。

魔眼蒐集列車の支配人である「ロズイーアンの家名を持つ上級死徒」

死徒二十七祖。その内の五百年単位で後継者に座を譲る血族のような祖。祖の死期が近付くと警告の予言を送り後継者作りを促す薔薇の予言者。

それこそがオレの目的の相手である。それは今、城にあった。

そこは彼女のホーム。その場所に人形が一人顕れた。

そうオレだ。そして目の前には一人の女性がいる。

「見つけた」

それは先程のマーリンとの出来事の再現だった。

場所が違う。相手が違う。状況が違う。それでもすることは同じだった。

相手は仮にも預言者と呼ばれる存在だ。

祖の死期が近付くと警告の予言を送り後継者作りを促す薔薇の予言者。

預言者という概念。それはオレの障害となりえる因子を確かに感じさせるものだった。

故に縛る。その生命。その全てを掌握する。

この内の全知全能を持つてして彼女を支配する。

そのためにオレはここにいる。ついでにありあわせの魔眼ももらう。何だ完璧じゃないか！

「薔薇の予言者。リタ・ロズィーアンね♪」

―根源でリタ・ロズィーアンの場所を確認して空間転移で背後を取る。

―まず「統一言語」で五感を封じこめる

それは人が人に話しかけるのではなく、世界そのものに話しかけて意味を決定させる言語。

人々が分かれる前にあつたとされる「真理」のようなもの。

存在論的なヒエラルキーとして、モノが世界に存在する時には、

「世界に存在するモノ」がモノの上に位置する。

世界に意味を伝える統一言語によつて

「世界に存在するモノ」に話しかけられ意思を伝えられると、

「それに否定する」ということが「世界に存在することの拒否」になるため、抗うことができない。故に「言語絶対」。オレの言葉はそのまま真実となる。

―次に投影した「愛の霊薬」を無理やり飲ませる

霊薬に長ずる一流魔術師のナイジェル・セイワード。

霊薬生成の術式にはナイジェル自身の起源「執着」を組み込んでいる。

それ故にサーヴァントにすら効果がある霊薬となる反面、

ナイジェル自身にしか生成出来ない霊薬となっており、その継承もほぼ不可能。

故に継承でもなく生成でもない。投影したものを利用した。

―「触手」で全身を拘束する

それはサーヴァントを容易く殺害できるほどの殺傷能力を持った触手だ。

根源接続者である沙条愛歌が原作で使用していたものだ。その強さは折り紙付きだ。

―「精神操作」をかける。

他者の精神に干渉する魔術は、物質的な代償を要しない代わりに術者の精神にも影響を与える。

人を呪わば穴二つ。とはいえ既に神代の魔術師すら超える力を有しているオレの魔術だ。

その影響は影響たり得ない。

―「結果」薔薇香る甘美な女性は今、ビクリビクリと四肢を震わせる。

足が震えて立ち尽くしている。思考と肉体が一時停止する。

動けない。体も心もあつけないほどにすくんでる。

震える唇から声さえ出ない。

その姿にドキドキする。こうなることはわかっていた。強い既視感を感じる。

これは先程の再演。対策を練り、その方向で成功する未来を見つけた。

こうなる未来へと可能性を改変した。

それでも、オレを超えてくるかもしれないと思ってしまう。

それが杞憂だと断言するには、世界はとも不思議で満ちているとオレは知っている

からだ。

ワンパターンだった。それは成功体験の追従。失敗を避けるための繰り返しだった。

この世界では概念は力を持つ。成功した体験。失敗した体験。それは世界に確かに

残される。

それを利用する。成功した体験という概念を強化する。それは繰り返し返すほどに力を

増す螺旋だ。

そしてこの状況はオレの望んだ未来であり、そして訪れた現在だ。オレは彼女に語り

かける。

「お友達になりましょう？」

九話

渴望。

薔薇の予言者。リタ・ロズイーアン。死徒二十七祖であり、今はオレの「お友達」だ。彼女はオレの「お友達になろう」という問いに肯定した。

干渉魔術。支配、魅了といった魔術を織り交ぜながらオレは彼女を誘導する。

言葉を連ねる。魔術を重ねる。体を重ねる。

どこまでも深く彼女と交わる。

オレの言葉に肯定するよう誘導する。それをわかっているのだろうか？

言うまでもない。わかっているに決まっている。

それでも彼女は、オレの思いのままになつていく。

それは「命令に従う」という問いに肯定する。

オレはどんどん自分に都合の良いような言葉を投げかける。

その全てに彼女は肯定していく。彼女の動きは辿々しくとてもまともな状態には見えない。

この光景は先程見た。知っている。そして結果も定まった。

前世での記憶から知る知識にある彼女。その肩書、その実力の不明瞭さに警戒心を煽られた。

それ故に全力。流石にマーリンよりは格下だろうとの思いもある。

だが慢心故に足をすくわれるのは避けたい。油断はしない。そんな心構えをする。さらにオレは言葉を続ける。理解者の顔をして話しかける。

「あなたは退屈に支配されているのね」

典型的な、貴族的吸血鬼。それでいて風聞の悪い趣味の持ち主。

酒池肉林の日々を過ごしているふた〇り趣味の快樂主義者。

「快樂にふける日々を過ごしているのでしよう——それでもあなたは満たされていないわ」

やりたい放題なくせに、根が歪よんでるためか、満たされずに退屈に支配されている。

「その渴望、私なら癒やしてあげられるわ」

—彼女は「セルフギアス・スクロール」にサインする。

『自己強制証明』（セルフギアス・スクロール）

それは権謀術数の入り乱れる魔術師の世界において、

決して違約不可能な取り決めをする時のみ使用される、最も容赦のない呪術契約の一つ。

自らの魔術刻印の機能を用いて術者本人に掛けられる強制の呪いは、

如何なる手段を用いても解除不可能であり、たとえ命を差し出したとしても、

次代に継承された魔術刻印がある限り、死後の魂すらも束縛される。

制約が破られるなどした場合は魔術刻印が自動的に反応し、違反した魔術師の体を内側から蝕む。

たとえ契約者本人に抵触する意思がなかったとしても、

「契約違反である」と見做された時点で問答無用で呪いは発動する。

その行為が中止されない限り呪いは持続し続け、

最終的には目や口から血を溢れさせた苦悶の表情で死に至る。

この証文を用いての交渉は魔術師にとって最大限の譲歩を意味し、

魔術師の間では滅多に見ることのできない代物である。

「これで私たち、本当のお友達ね♪」

——それでも彼女はこの呪術契約を結んだ。

十話

三位一体。

死徒二十七祖の一人だけあって、所有している魔眼にはなかなかのものがあつた。おかげで強力な魔眼が確保できた。これにより新たな人形を制作する。

それによりオレは二体の人形を確保することができる。

そしてオレは三体の人形を作成することを目的としている。

一体目はこの姿。今使っている人形だ。

性能は本体と同一。英雄のような規模の身体能力こそないが、それ故に非常に使いやすい。

自由に現代での生活で過ごすための肉体だ。

そして次に作る人形は先程確保した魔眼を利用して作成する。

オレには不可能に等しい奇蹟をも可能にできるが、

魔術回路の数が少なく規模と回数にある程度の制限がある。

そこで魔眼の魔術回路を上乗せすることでその規模と回数の制限を緩和させる。

今回はこの魔眼の人形を作ることが目的だ。

そしてそれらを利用して作成する三体目の人形。

これら三体の人形はオレが本体の代わりに下りる、ある役割をもたせた肉体だ。

——三位一体。

唯一まことの神は、

父、子、聖霊という三つの異なる位格をもっていて、

それら三つはそれぞれ100%神である。

ところで2世紀の神学者でテルトゥリアヌスという人物がいる。

彼は、人類の歴史を以下の三つの時代に分けて考えた。

旧約聖書の時代

イエスの時代

イエスが死んで復活して、イエスを信じる者に聖霊が下るようになった時代

そして、それぞれの時代は「父なる神」、「子なる神」、「聖霊なる神」に属していると考えた。

神が一人であることを強調するテルトゥリアヌスのような考え方は専門用語で「様態論(modalism)」と呼ばれる。この考え方の特徴は、

神はあくまで一人で、父、子、聖霊というのは、

同じ神が異なる様態(mode)を取って現れただけだと考えた。

オレはこの三体の人形を用いて「神と等しい性質をもつ」という概念を付与させる。これはオレの安全へと近づぐための礎の一つである。

自身の安全を確立させるには力が必要だ。そして力とは自ら勝ち取るものだ。

与えられたものとは奪われてしまえば脆いものだ。ならば奪えない力を得る必要がある。

オレは根源接続者だ。その力は比類のないものだが、その力を行使する肉体は人間のそれだ。

ならばより強くなればいい。そのための手段がオレにはあるのだから。

今後の目的のためには三体の人形の完成が必要だ。それも早ければ早いほど良い。

それはオレの安全がより高まるということを意味するからだ。

これがオレの直近の目的の一つである。

十一話

魔眼の人形。

手に入れた魔眼を用いて人形を制作する。だがその前に、

薔薇の預言者。リタ・ロズイーアン。彼女——リタから入手した魔眼にはある細工を施す。

手に入れた魔眼——魅了の魔眼。

意思を込めて目を合わせた相手を魅了し、短時間ながら意のままに操ることが出来るというもの。

「魅了」という名称だが、必ずしも異性に対する性的な魅惑を意味しない。暗示の一種。人工的な魔眼では「魅惑」や「暗示」までが限度だとされている。

これはそれを超えた、他者の運命への介入を可能とする強力な魔眼であるノウブルカラーだ。

それに細工を施す。人形師の魔術師。蒼崎橙子の業を利用する。

魔眼の中に魔眼を作り、合わせ鏡のように魔眼の効果を無限に増殖させる。

「積重魔眼」「合わせ鏡の底なしの穴（クラインキューブ）」などと表現されるものだ。

魔眼の効果や強さ自体は変わらないが、普通の魔眼が単発銃であるなら、

これは無限の弾数を有したマシンガン。単発をレジストできても、

怒涛のように押しよせる全ての視線を防ぐことは不可能。

例の魔術師は、無限に等しい魔眼の力を制御しなければならぬため、

「行動」を禁じることに特化していたようだ。

積重の効果を使わなければ、普通の暗示も可能だという。

もちろん、オレはその無限に等しい魔眼の力の制御すら可能である。

それは魔術師である彼女と、根源接続者であるオレとの違いである。

そしてそれは魅了の魔眼の効果をより多岐に渡り発揮できるということである。

細工は終わった。人形の制作に取り掛かる。

とはいえ、人形の制作はこれで二度目である。

気分が完全にルンルンしている。アヴァロンでクルクルしながら制作した。

大丈夫だとは思いますが、念の為にマールンには見ないように命令している。

契約も結び念入りに支配をしている。

彼女の頭を撫でて言葉をかける。

「ふふふふ」

マーリンの様子からもその成果は発揮しているようだ。

その様は例えるなら陶酔と恭順。

それでも警戒をするのは、その驕りが命を奪いかねない世界だからだ。

とはいえこの場所はこの世界において重要な場所だ。それはオレにとつても変わらない。

この場所はオレの本拠地だ。本体はここにある。人理焼却をも回避可能な場所だ。それも当然だ。

マーリンからすれば、いきなり襲われたかと思えば、勝手に本拠地にされて、

瞬間移動したと思つたら、しばらくして魔眼を持つて戻ってくる。この数時間で随分なことだ。

そう思うが、時間は有限だ。オレの安全の確保は何よりも優先するべきだろう。

そうしている内に魔眼の人形は完成した。

魔眼は完全な制御下にあり、任意に魔眼の効果を発揮させることができる。何も問題はない。

何よりも魔術回路の上乗せができた。この魔眼の人形をもつて更に先へと手を伸ばせる。

オレは次のステージへと足を進めることにした。

十二話

平行世界。

それはいわゆる「別の可能性を描いた世界」を指す。

世界はひとつではなく合わせ鏡のように無数に展開しており、だからこそ未来は一つきりではない。

オレはそれ——平行世界への干渉をする。

TYPE—MOON世界において並行世界への干渉は、
魔術の域を超えた魔法として認知されている。

それほどまでの難事であるということだ。しかしオレは沙条愛歌。根源接統者だ。

TYPE—MOON世界におけるすべての現象、因果はこの根源の渦から始まってい

る。

過去現在未来、果ては並行世界にまでわたる情報と知識もこの中に存在している。だからこそオレは平行世界への干渉が可能というわけだ。

それは・“Fate／Labyrinth”という小説で証明されている。

F a t e / L a b y r i n t h

それは沙条愛歌がセイバーと共に亜種聖杯を求めて伝説の迷宮をゆく物語。行く手を阻む数々の幻想種たち、遭遇する新たなサーヴァントたち。

沙条愛歌が登場する。それだけでもおすすめの作品だ。暇があれば読んでみたいものだと思える。

さて、平行世界への干渉——そのための準備は整った。

とはいえそれは平行世界の少女に憑依するということではない。

それには“色位”レベルにまで弱体化してしまうという前例があるからだ。

それは他者と比較をすれば、けして弱いわけではないだろう。

そして意図的な行いではなかったことを鑑みても、それは利口な判断とは考えがたい。

この世界において前例とは非常に強い因果となる。それゆえに扱いには注意が必要だ。

安全確実を重視する。それがオレの基本方針だ。

オレには理解できる。今のオレでも油断すれば死んでしまう。

そのための方法も可能性も存在している。

——より確実な安全を手に入れる必要がある。

そのためには行動が必要だ。そこには当然リスクも存在する。

それでも行動することが必要だ。そのためにオレが考慮すること、

それは発生するリスクを最小限にすること。

そして得られるリターンを最大限にすることが大事となってくる。

その足掛かりとなるのが平行世界だ。

この世界。つまりオレが存在するこの世界では好き勝手することができない。オレの行いによりこの世界の結末が決定してしまえばそれは剪定事象となる。

いまはまだ編纂事象にあるこの世界はしかし、

オレの振る舞い一つで崩れ去る可能性がある。

それゆえにあまり大きなことはしない。

今はまだ――。

そう、オレは平行世界。その中でも剪定事象となる世界が今回の目的だ。

十三話

剪定事象。

それがオレの今回の目的だ。

それは完全に別世界になり、いずれ滅びる枝葉の並行世界のことだ。

そして並行世界とは多少の差異はあっても未来は同じになる大幹の並行世界群。

それを編纂事象という。

単純に例えると、編纂事象は正史のメインルートだ。

剪定事象はバッドエンドルートである事が多いが、

剪定事象は単にメインルートから外れすぎて特化した結果、

多くの分岐可能性を失った世界であって、必ずしもバッドというわけではない。

善し悪しに分けるとなると、

善い流れとは「安定した、今後もより多くの派生を生む可能性に満ちた流れ」であり、悪い流れは「先鋭しすぎたため、もう道を変えられない一本道の流れ」を指す。

剪定事象の中には編纂事象にあるどんな世界よりも先に進み、

希望と幸福に満ちた理想世界もあつたが

「それだけでももう完成し、終わるもの」である為、

理想世界の条件が確定した段階で「剪定」されてしまう。

樹を育てる時、不要な枝を切り落とすように、

基本軸である『幹』から離れすぎた世界はたとえ理想郷であろうと「打ち切り」になる。

もう何をしてもし滅亡が決定したものの、どれほど発展していようと進化が止まったものの、

といった『先の展望が見えた』世界を続けていくほどこの宇宙は寛容ではないからだ。

まだ誰も知りえない未来のために宇宙が膨張する以上、

分かりきった結末のためにエネルギーを使うことはない。

重要なことだが、「先の発展の可能性が存在する事が大事」なのであって、編纂事象の世界と比べて著しく繁栄や衰退してゐる事、それ自体が剪定の対象になり得る訳ではない。

剪定事象が確定する世界を根源から把握し剪定される前に資源を回収する。

それはこれまで行ってきた何よりも規模の大きい事象となるだろう。

これまで抑止力の判定からグレーゾーンで回避してきたが、その対策も必要だ。抑止力は強大だ。しかしこれもまた完全無欠ではない。

そのために剪定事象を利用する。

そのための準備はすでに整った。

オレが創り上げた二体目の人形には外付けの魔術回路、即ち魔眼が搭載されている。それも他者の運命への介入を可能とする強力な魔眼であるノウブルカラーだ。

それゆえに魔術回路としての質も量も十分なものがある。

これまで魔術回路の量がE評価でありながらも、万能と呼べる振る舞いができた。

ならばその量が増えればどうなるのか？

それは、全能というカタログスペックをより発揮できるということだ。

さらに言えることがあるとすれば、聖杯とは魔力の塊だ。

そして聖杯とはあらゆる願いを叶える代物だということ。

ならばより多くの魔力を手に入ればどうなるのか？

想像するだけでも愉快だ。オレは自由に使える莫大な魔力を手に入れる。

そのための手段はもうオレの手の内にある。

ターゲットは月の聖杯戦争の勝者に与えられる勝利者の証——完全なレガリアだ。